
雪風のZERO

黄昏れた人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪風のZERO

【Nコード】

N0170M

【作者名】

黄昏れた人

【あらすじ】

覚える能力を得たサイトが、タバサの使い魔になって生活する物語。

かなり後でスパロボの技が出るかも知れません。

人物紹介

タバサの母親の名前が原作に出ていなかったのも、セレネにいたします。

人物紹介

タバサ（シャルロット・エレ・ヌ・オルレアン）

シャルルの愛娘で、トリステイン王国、トリステイン魔法学園に留学している。ゲルマニア出身のキュルケとは仲がよく親友と呼べる仲である。

サイト（平賀才人）

シャルルにかつて召喚された少年。シャルルが、死んで埋葬された時に現代に戻った。年は召喚された頃の年齢に戻ってり現在は16歳の普通の高校生。スパロボにはまっていた。

再び召喚され、使い魔のルーンは、胸にイーヴァルディー、あとは両手に刻まれており右手のルーンがメイジの魔法を覚え、それを自分で変えて使うという能力。左手のルーンが自分の成長につれ能力を覚えていく能力。最初は炎の能力を持っている。

シャルル（シャルル・オルレアン）

今は亡きタバサの父親で元サイトの主人。

セレネ（セレネ・オルレアン）

シャルルの最愛の妻であり、シャルロットの母親。魔法の薬で、心を失っている。

アダム・ブレイド

サイトのルーンの使い方を教えた謎の神父。

イヴ・ノイシュヴァンシュタイン

アダム・ブレイドと共にいた、少女。人の名を覚えられず、勝手にあだ名をつけてしまう。

クルス・シルト

アダム・ブレイドと共にいた、少年。イヴに「山田」と呼ばれている。

てるやまもみじ
照山最次

アダム・ブレイドと共にいた、男。イヴに「内田」と呼ばれている。

第1話再会

タバサ - side -

あの日から、どれだけの時間がたったんだろう。

母様が心を壊されて、父様がジョゼフに殺されて、あの人が消えてしまった。私が幼い頃からずっと一緒に居てくれた人、平賀才人。

「タバサ、そろそろ始まるわよ」

今日は、学院の使い魔召喚の儀式の日。私は何を召喚するんだろう。

「次、ミス・ツエルプストー」

「はい」

次はキュルケの番、その次は私の番。

「やったわ。飛竜山脈のサラマンダーだなんて」

サラマンダー、キュルケに相応しい使い魔だ。次は私の番。
この儀式に偽名を使っても、成功するのかな・・・

「次、ミス・タバサ」

私の番だ、早く終わらせて本が読みたい。

「我が名はタバサ、五つの力を司るペンタゴン。我に従いし使い魔を、召喚せよ」

これでゲートが開いた、私にはどんな使い魔がくるのかな・・・

サイト - side -

「ふう」

今日の練習も終わった。

あの日から、どれくらいたったのか、親友を無くし戻って来たら召喚された時の歳に戻っていた。

今は高校一年、16歳だ。と言っても、学校には通っているわけではない。通信制でやっているからだ。

今でも複雑な気持ちだ。向こうでは、すでに20年近くいた訳で、こっちに戻ったときは自分は幼くなっていた。中学に入る時に両親に向こうでの生活の話をした。最初は信じてもらえなかったが、俺が真剣だということがわかった両親は、この話を信じてくれた。本当は、まだ疑っているんだろうけど・・・

中学の頃から有名な剣道の達人の元でお世話になっている。

「平賀、少しいいか」

「はい、何ですか？先生」

「お前のことは両親から聞いている。正直、今でも私はあまり信じてはいない。しかし、向こうにお前の守りたいことがあるのなら、お前に渡しておきたいものがある」

「何ですか？渡したいものって」

「来ればわかる」

そう言われて、先生に付いて行った。そこは、いつも練習をしていた道場だ。しかし連れて行かれたのはその道場の奥の部屋。そこには一本の日本刀があった。

「先生、これは？」

「これは、この道場に代々伝わっている刀だ。これをお前に譲ろうと思う」

「そんな！そんな大切な物を頂く訳にはいきませんよ！」

「私はな、お前を最後の弟子にして、この道場を閉じようと思っ
ているんだ。それで、この刀をお前に譲りたい。大切なものの為に使
って欲しいんだ」

「先生・・・わかりました。その刀大切にしたいと思います」

そう言っ
て先生から、刀を渡された。刀を抜いて見ると、未だに切
れそうな立派な刀だ。

「・・・平賀、迎えが来たようだ」

「え？」

後ろを見ると、いつぞやの時のゲートがあつた。

「両親には私から言っておこう。行って来い、我が最後の弟子よ」

「はい。入ってまいります」

そう先生に言い残し、俺はゲートを潜った。

—————

気がついたら、白い空間にいた。そして、前から男3人と女1人が
歩いてきた。

「あんたら、誰だ？」

「ああ？俺か、俺はブレイド。アダム・ブレイドだ」

「僕は、イヴ・ノイシュヴァンシュタイン。長いからイブ・ノイシ
ュヴァンシュタイン様っでいいよ」

「『増えてる増えてる』」

「僕は、クルス・シルトといいます」

「俺は、てるやまもみじ照山最次だ」

「いったいここはどこなんだ？ハルケギニアには、こんな場所無いと思うが・・・」

「お前は？」

「あ、俺はサイト。平賀才人だ」

「じゃあ略して田村ね」

「へ？」

「イヴさんは名前を覚えられないんです」

なるほど、だから勝手に名前を付けるのか。

「さて、時間がない。簡単に説明してやろう。俺達は、貴様がこれから身に付ける能力を教えるためにきた」

「これから身に付ける能力？」

「お前が召喚される世界の話だそうだ。詳しい事は俺も知らん」

知らないって一体何なんだ。

「お前が身につける能力は、『覚える能力』だ」

「覚える能力？覚えるって何を」

「あらゆる能力を覚える能力だ。後は自分で確かめることだな。そろそろ行け坊主」

「あ、ああ」

よくわからないけど、まあいいか。

「行っただか」

「よかつたんですか？神父様。本当の事を言わなくて」

「ああ？山田あ、貴様はいつから俺様に質問できるようになったんだあ？」

「いや、山田の言う通りだ。本当によかつたのかよ、ブレイド」

「ちつそのほうが面白いじゃねーか」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

――――――――――

タバサ - side -

・・・これは、夢？

「嘘！？タバサが平民を！」

「タバサが平民を召喚したぞ！」

目の前にいるのは、黒髪を男の人。でも彼は・・・

「サイ・・・ト・・・？」

「ただいま」

「サイト！サイトサイトサイト！」

間違いない、サイトだ。帰ってきてくれた。

第2話契約・約束

サイト - side -

いきなり泣きながら抱きついてきたシャルロットを優しく抱きしめる。

今は、タバサって名乗ってるのか・・・

「あ、あのミス・タバサ。できれば早く儀式を終わられてくれないかね」

ここの教師だろうか、頭が寂しい教師だな。

「タバサ。先生も困ってるみたいだから早く契約してくれるかい？」

「・・・わかった」

そう言うのと離れてくれた。まだ目が赤いけど今は気にしていられない。

「我が名はタバサ、五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

契約のためのキスをする。タバサとのキスは涙の味がした。

シャルルの時はどうだった？思い出したくもない・・・鬱になる・・・

「ぐっあああああ！！」

ルーンが刻まれてるのか！さすがに痛い！両手の甲と胸ってなんだ！

「ぐつはあ・・・はあ・・・」

「サイト、大丈夫？」

「ああ。大丈夫だよ」

しかし、三箇所にルーンが刻まれるなんて、どうなってんだ。

「ルーンを見せてもらってもいいかね？」

「ええ、いいですよ」

「これは珍しいな三箇所に刻まれているなんて。両手のルーンは見たことがないが、胸のルーンは『イーヴァルディー』かね」

「『ゼロ』」

「む、今なんと？」

「このルーンの名前です。その力は『覚える』能力です。詳しくは俺も知りません。今、頭に流れてきました」

今、左手のルーンが少し光ったような、それと同時に炎の使い方がわかった気がする。

「それは興味深いですね。あとで話を聞かせていただけますね？」

「ええ、いいですよ」

「それでは、後ほど。次・・・」

教師の人と話をして、俺とタバサは少し離れたところまで歩いた。

そして、またタバサに抱きつかれた。それと同時に真っ赤な髪をした女性が近づいてきた。タバサの友達かな？

「あなたがタバサの使い魔ね。ふん、お名前は？」

「平賀才人。サイトって呼んでくれ」

「サイトね。わたしは、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォ

ン・アンハルツ・ツエルプストー。キュルケって呼んでね。しかし驚いたわね。タバサが男の人に抱きつくなんて」

それにしてもかなりの美人だな。特に胸とか・・・

ゴンッ

「痛っ！何すんだよタバサ」

「・・・」

「うっごめんなさい私が悪かったです」

すごく冷たい目で見られてしまった・・・

タバサ - side -

まさかサイトが来てくれるなんて思わなかった。でも・・・うれしい。

「タバサ！いつまで抱きついてるの」

さすがに抱きつきすぎたみたい。もしかしたら、私顔赤いかも・・・

ドカーン！！！！

「なんだ！」

爆発音が聞こえたのと同時に、サイトが腰に付けていた剣に手をやったせいで、私はさらにきつくサイトに抱きつく形になった。嬉しいけど、苦しい・・・

「サイト、タバサが苦しんでるわよ」

「え、タバサごめん。大丈夫か？」

「大丈夫。さっきの爆発はルイズ？」

「そうみたいね。どんな使い魔を呼んだのかしら、見に行きましょう」

キュルケは楽しそうに行ってしまったので、私たちは後を追ってついて行った。

キュルケ - side -

さてさて、ルイズは一体どんな使い魔を召喚したのかしら。

『わああああー!!』

『きゃああああー!!』

な、何今の悲鳴は！何かあったのかしら！？

「ゼロのルイズがエルフを召喚したああああー!!」

「エルフですって！？ああもう！ルイズったら、よりによってエルフを召喚するなんて！」

まさかここで戦闘になるとか言わないわよね。

「あのエルフ、敵対意識はないみたいけど。ってタバサ、なんで離れてくれないんだ？」

確かに敵対心はないみたいね。それにしても、タバサがそこまで心を許すなんて、一体あの二人はどんな関係なのかしら。

サイト - side -

エルフを召喚する女の子が、少し気になるが今は問題ないだろう。

「今日の授業はここまで、生徒の皆さんは自分の使い魔としっかりとスキップしてください」

どうやら今日の授業が終わったのか、他の生徒は皆自分の部屋に戻っているな。

「ところでサイト。その剣何？」

「あ、これか？これは先生にもらった剣なんだ・・・ってあれ？」

「どうかしたの？」

「なんでだ、どうなってるんだ。」

「剣の形が変わってる！」

「「え？」」

先生にもらったときは確かに日本刀だったのに、こっちに来たら剣自体の形が変わってるなんて・・・

「その剣について後で調べてみる。今は部屋に戻る」

「え、ああ。わかった」

—————

移動して、タバサの部屋に着いた。

「やっぱりタバサは本が好きなんだな。昔と変わらないよ」

部屋についてみたら案の定、本でいっぱいだった。ベッドも洋服ダンスもシンプルだ。

「昔と変わらない訳ない、私は変わった」

「そうだよな。ごめんな、タバサ勝手にいなくなって」

そう言うのとタバサは抱きついてきた。俺は、何も言わずにタバサの頭を撫でた。

「二人だけのときはシャルロットって呼んで、お願い」

「わかったよ、シャルロット。約束だ、もう勝手にいなくなったりしないよ」

「約束」

涙目で上目遣いしてきた。そのときなぜかドキッとしてしまった。落ち着け俺！シャルルの子だぞ、ドキドキしてどうすんだ！

「そろそろ寝る」

「そ、そうだな。ところで俺はどこで寝ればいいんだ？」

そう言うのとタバサは、ベッドを指差した。

「それは？」

「ベッド」

「それはわかるけど、なんで1つしかないベッドを指差すんだ？シャルロット」

「いっしょに寝る」

あゝ昔みたいに一緒に寝るのが、それなら納得・・・しちゃ駄目だ！

「あのなシャルロット。年頃の女の子が、そんなこと言っちゃだめだぞ」

「サイトは私と寝るの、嫌？」

うつ上目遣いのタバサを見たら、かなりドキドキしてしまった。頬が少し熱いのがわかる。

「あゝわかったよ。一緒に寝るからそんな目するな」
「うん」

うつまたドキドキした。なんなんだいたい・・・

タバサ - side -
久しぶりにサイトと寝れる。少し、嬉しい・・・かな・・・

「あ、そうだ」

「どうかした？」

「明日の朝、ルーンとあの剣使ってみるけど、シャルロットも見てみるか？」

サイトのルーンは気になるし、あの剣はもつと気になる。

前に読んだ本に、あれと同じ剣が書いてあったような気がするけど・・・ちがうのかな。

「私も気になる。明日は休みだからちょうどいい」

「そっか。じゃ明日だな」

そう言つてサイトは、頭を撫でてくれる。これも久しぶり。

「それじゃお休み。シャルロット」

「お休みサイト」

これから、どんな生活になるんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0170m/>

雪風のZERO

2010年10月9日03時53分発行